

# 「天草版平家物語」の構成と言語（二）

## ——問答形式の特性について——

安 達 隆

一 \*

### 本論の内容

- （ウ） 卷I第二章以降の問答形式
- （6） 問答層の言語的浸透
- （7） まとめ

### 前論の内容

- （1） テキストにおける問答形式の意義
- （2） 問答形式の基本構造
- （3） 問答形式の類型
- （4） 問答形式の表現性
- （5） 問答形式とテキストの構成
- （ア） 卷I第一章の問答形式の類型
- （イ） 問答形式と第一章の構成

---

\* 人文学部教授－日本語学

## (ウ) 卷Ⅰ第二章以降の問答形式

「天草版平家物語」の卷Ⅰ第二章以降に位置する問答形式は、基本的には各巻の冒頭に配置される。つまり卷Ⅰ第一章のように、テキストの内部に問答形式を置くことはない。また卷Ⅰ第一章の機能を逸脱するものでもない。その限りでは問答形式の使用は単調である。しかし単調な中にも、部分的には配置の仕方に工夫の跡が認められる。編纂者の意図が働いているのである。このことがテキストにおける問答形式の言語的特性を規定するはずである。したがってここでは、問答形式の配置の仕方について、二、三の特徴を指摘しておこうと思う。

「天草版平家物語」は全四巻からなる。問答形式は原則的にテキストの切れ目に配置される。構成上の最大単位とも言うべき巻の冒頭の問答形式を対象に考察を加えることにしたい。卷Ⅰ第一章については、前節において述べたところである。したがってまず巻Ⅱから検討を始める。

Ⅱ―(1) Vさてまことにたれにも、かれにも清盛は難儀をかけた人ぢやの？ またその祇王がことも聞きたい。お語りあれ。

Q 長いことなれども、申さうず。清盛はこのやうに天下を掌に握られたによつて、世間のそしりをも憚らず、人の嘲りをもかへりみいで、不思議なことのみをせられてござる。

「天草版平家物語」の巻Ⅱは「祇王」の話から始まる。原テキストでは「祇王」は「吾身榮花」の次に位置する。「天草本」が「祇王」の位置を大幅に移動させたのである。この処置の理由については様々推察できるが、本稿では特に言及しない。<sup>(二)</sup>

巻Ⅱ―(1)の問答形式は類型から言うと、〈展開型〉第二類である。〈聞き手〉の発話は、承前表現形式を含む修辭的疑問表現から始まり、〈語る素材〉「祇王がこと」を提示した上で、〈語り手〉に語りを促す発話が続く。つまり巻Ⅱの冒頭は、全巻の最終章を承けることを表現形式の上でも明示するものである。全巻最終章は「有

王説話」であり、本文は「このやうに人の思ひ歎きの積もる平家の末は何とあらうか？ おそろしいことぢや。」という語り手の慨嘆をもって終わる。問答形式における「聞き手」の承前の発話は、直接的にはこの本文に照応する。なお付言すれば、この末尾の言表は、ここに論ずる問答形式の言語と位相を一つにする。具体的にはQこのやうに人の思ひ歎きの積もる平家の末は何とあらうか？ おそろしいことぢや。

Vさてまことにたれにも、かれにも清盛は難儀をかけた人ぢやの？ またその祇王がことをも聞きたい。お語りあれ。

と組み合わせれば、そのまま問答形式となり得る。

前章は巻Iの第十章・十一章・十二章の三章にまとまる構成となっている。

I—(10)Vその鬼界が島の流人どもを清盛の許された様をお語りあれ。

Q后に立たせられた清盛の娘中宮御懷妊とあって、

—(11)Vさてこれはまことにあはれなことであつたなう？ して少将や、康頼はそのまま上られてあつたか？

Qそのおことぢや：この人々は鬼界が島を出て、

—(12)Vして俊寛は何と果てられたぞ？

Qそのおことぢや：鬼界が島へ三人流された流人、二人は召しかへされて

この三章の關係は、各問答形式の「語る素材」間の意味關係によつて標示することができる。第十章では「鬼界が島の流人どもの許された様」と総括的に素材が示される。それを個別的に承けて展開させるのが第十一章「少将・康頼の上洛」、第十二章「俊寛の最期」である。問答形式によるこの種のまとまりは既に巻I第一章に見たところである。巻II第一章の問答形式は、その類型から言うと、巻I第十章のそれに対応する。



また問答形式 II—(1) には「またその祇王がことを聞きたい」と承前表現形式「また」「その」を含む。「また」は前章の「有王説話」に続いてこの話を語ることを依頼する表現とすることができ、「その」はダイクシス的な指示詞とも受け取れなくもないが、〈聞き手〉の確認の発話に示される「清盛に難儀をかけられた者」という内容を意味すると考えたい。つまり巻 II 第一章の問答形式は、新しい題材による語りの開始を示す一方、テクストの構成に関しては前章の内容と連続することを示すものともなっているのである。さらに巻 II 第一章は原テクストを移動させたものである。問答形式は、移動によって生ずる構成上の不備を解消し、テクストの構成に整合性を付与する機能を託されているとも解される。〈聞き手〉の冒頭の発話は、「さてまことにたれにも、かれにも清盛は難儀をかけた人ぢやの？」という慨嘆・確認の疑問表現である。この発話が媒介となつて、「祇王がこと」は前章の「有王説話」との連関性を保証されるのである。

テクストの構成上、区分しつつも統合するという導入方法は、「天草本」の各巻の冒頭に共通する構成原理である。巻 III・巻 IV の冒頭を見てみよう。

III—(1) V ゆふべの物語があまり本意ないほどに、今はまた木曾殿の成り立ち、その謀叛のやうをもお語りあれ。

Q さてきて果てしないことをおほせらるる：さらば語りませう。

V その木曾は何とやうに謀叛をおこされてあつたぞ？ その由来をもここに続けてお語りあれ。

Q まづ木曾殿はそのころ信濃の国におちやつてござる。

IV—(1) V 頼朝は木曾がこのやうな狼藉を聞いてしづめうともせられんだか？

Q なかなか頼朝もこの狼藉を聞いてしづめうするために、弟の範頼と、義経をさしのぼせられたが、

卷Ⅲ第一章の問答形式は、〈聞き手〉が最初の発話において〈語る素材〉を総括的に示した上で、さらにもう一度繰り返しているところに特徴がある。ただし二度目の発話は質問形式の疑問表現になっている。また承前表現形式も「今はまた」「その謀叛のやうをも」という言い方であって、卷Ⅱ第一章の問答形式のように前章に連続する表現ではない。前巻との連続性はむしろ、話す行為の属性としての表現「ゆふべの物語があまり本意ないほどに」という言い方によって示される。つまり卷Ⅲ第一章の問答形式は、テクストの構成上の連続性・統合性を希薄にし、区分性つまり卷Ⅲの独立性を強くすると見える。卷Ⅲは新たに木曾を題材とする語りの開始なのである。

区分統合の原理から言うと、卷Ⅳの冒頭は区分性が最も希薄な問答形式によってなる。卷Ⅳに先行する卷Ⅲは「木曾の上洛」と「平家の都落」を中心とする構成である。卷Ⅳ第一章に先行する卷Ⅲの各章の問答形式は次の通りである。

Ⅲ—(1) V して木曾は都へ上つて躰などはよかったか？ また時宜法も知った者でおちやったか？

Q そのおことぢや：

—(12) V してその間に平家は何とせられたぞ？

Q そのことでござる。

—(13) V 木曾が京で狼藉をしたは何たることぞ？

Q さればそのことでござる。

IV—(1) V 頼朝は木曾がこのやうな狼藉を聞いてしづめうともせられんだか？

Q なかなか頼朝もこの狼藉を聞いて、

―(2)Vおきたびれあらうずれども、こよひもなほ先をお語りあれ。

Qかしこまった。寿永三年正月一日のことでごさる。

卷Ⅲ第十三章から卷Ⅳ第一章への展開は、「木曾の狼藉」ということを共通の題材とすることでひと続きのものである。そのことから言うと、卷Ⅳは次の第二章から始めてもよさそうなものである。卷Ⅳ全体の構成から見ると、問答形式のあり方は他の各巻に比べて単調・単一的である。〈聞き手〉の発話は〈展開型〉第三類で始まる。それがいくつか続いて、その間に応答詞に近い〈展開型〉第四類が挟みこまれるというあり方である。

IV―(4)Vして木曾は何となったぞ？

Q木曾はもしものことがあらば、

―(5)Vして兼平が兄の樋口の次郎は何となったぞ？

Qそれは十郎藏人を討たうずると言うて、

―(6)V木曾ははや滅びたが、平家は何となられたぞ？

Q平家は正月中旬の頃讃岐の屋島から

―(7)Vちつともそなたにただ口はおかせまいぞ：なほ先へお語りあれ。

Qさてさていかい平家上戸でごさる。義経はまたその山に

―(8)Vして生田の森の方には何とあったぞ？

Q大手生田の森には

第四章から第六章まで〈聞き手〉の同じ形式の発話が続く。そして第七章に語りを促す応答的な発話が位置し、再び同じ質問形式の発話に戻る。卷Ⅳの問答形式はおおむねこのパターンの繰り返しである。〈聞き手〉は次々に〈語る素材〉を質問形式の発話によって提示し、〈語り手〉は直接にそれに応じて語る。単調・無策と言えはその通りではある。しかし同一形式の問答を重ねることによって、かえってテンポの速い展開が可能にな

る。巻IVが源平の合戦を中心とすることを考慮すれば、このような問答形式の配置の仕方もその速いテンポの反映を意図しているともみなし得る。

巻IIIから巻IVへの展開は、明確な区分を示さぬ問答形式によって計られる。「木曾の狼藉」を媒介として、「木曾」から「頼朝」直接的には「義経」へと行動主体が移行する。「木曾の由来から最新まで」というテキストのまとまりを構成するか、あるいは「木曾」を分断して、それぞれの行動主体によってまとまりを構成するかの違いである。「天草版平家物語」の編纂者は、後者によるテキストの構成法を採ったのである。それは先行の巻II・巻IIIの冒頭をも視野に組み込んだ選択でもあったのであろう。

巻Iの冒頭問答形式は、テキスト全体の冒頭としての機能を意図して設定された。それは巻IVの結末の問答形式に直接呼応することにおいて、全体を視野に納めるものであった。巻IIの冒頭問答形式は、先行する巻Iとの統合機能を意図するものである。それは巻II第一章が原テキストの構成を変更したことを承けてのことである。巻IIIの冒頭問答形式は、先行の巻IIの題材から新しい題材への転換を承けて、巻Iの冒頭問答形式に相当する開始機能を意図して設定される。巻IIIをもって「天草版平家物語」は前半と後半に大別されるとも言える。それは「平家の由来」を題材とする構成から「源氏の由来」を題材とする構成への転換でもある。各巻の冒頭の問答形式は恣意的に配置されるものでは決していないのである。この転換に整合性を与えるのが問答形式である。というより問答形式がこの構成を形成するのである。

「天草版平家物語」の巻IV第十二章は特徴のある章である。巻I第一章及び巻IV最終章と巻IV第十二章の三つの章が複数の問答形式をその内部に含む。巻IV第十二章は第十一章と併せて「本三位中将重衡」についての記事を記載する。そのうち第十二章は「重衡の東下り」の話である。第十一章と第十二章の問答形式の有りようは次の通りである。

IV—(II)V重衡は何とおなりあったぞ？

Q 重衡は六条を東へ渡されてござった。

〔百〕同十四日本三位中将重衡六条ヲ東へ渡サレ玉フ。

―(12) V とてもものに重衡の東下りのことをもお語りあれ。

Q ここはとつと面白いところでござるほどに、本々と節をつけて語りませう。鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝しきりに申されければ、三位の中将重衡をば三月十三日に関東へこそ下されけれ：梶原平三土肥の次郎が手より受け取って、具し奉ってぞ下りける。

〔百〕鎌倉前右兵衛佐頼朝頻ニ申サレケレハ三位中将重衡ヲハ三月十三日関東へコソ下サレケレ。梶原平三土肥次郎カ手ヨリ請取テ具シ奉テソ下リケル。

「天草本」は「百二十句本」（斯道文庫蔵）の本文に一致する。この一致をもつて、「天草本」の「本書」を「百二十句本」に比定するひとつの根拠となっていることは周知の事実である。原テキストの本文を暫く引用した後、「天草本」は

IV―(12) V はあ節でも面白いが、ところによっては聞えかぬる：ただ物語にめされい。

Q ともかうも御意に従へほととぎすと申すことがござる。心得まらした。

さうさうして日数が重なれば、やうやう三月も半ば過ぎ、遠山の花は残る雪かと見えて浦々島々も霞み渡り、こし方行く末を思ひつづけて何たる宿業かと悲しまれたれども、甲斐もなかった。

〔百〕都ヲ出テ日数経レハ弥生モ半ハ過ナントス。遠山ノ花残ル雪カト見エテ浦々島々モ霞渡レリ。来シ方行末思ヒツツケテイカナル宿業ヤラント悲玉ヘトモ甲斐ソナキ。

〈聞き手〉の要請で本来の口訳に戻る。編纂者がいかなる意図でこのような趣向を試みたかは様々に解釈できようが、少なくとも問答形式の媒介なしには、このような試行が不可能であったことだけは確かである。しかも問答形式(12)は、〈聞き手〉の最初の発話「重衡の東下りのことをもお語りあれ」を除いて他はすべて、テキスト

の語りの内実とは直接関係を持たぬ発話である。〈語り手〉の発話に見られる軽妙な応答に、編纂者の自負を見たのは安田章であるが、もう少し異なる観点からこの問答形式の意義を考えてみたい。<sup>(三)</sup>

問答形式<sup>(12)</sup>は問答自体には何の齟齬もきたしてはいない。〈聞き手〉と〈語り手〉の間には役割分担をした対称的な関係において、コミュニケーションが成立している。そこには〈語り手〉の洒脱・軽妙な言葉の語り口さえうかがうことができる。何の矛盾も存在しないかに見えるこの対話に、編纂者にとつて回避しえぬ陥穽を垣間見るのは牽強付会に過ぎるであろうか。繰り返すことになるが、〈聞き手〉〈語り手〉が交互に発する発話の連関には、意味的にも、機能的にも矛盾は一切ない。

ところで今この問答形式について、〈語る素材〉という観点に立つて分析すると、問答形式の統一性に生ずる亀裂を認めることができる。具体的には、〈語り手〉が「本々と節をつけて語る」素材と〈聞き手〉が要請する「ただの物語」としての素材との間に生ずる亀裂である。〈語る素材〉と言っても厳密には、同一内容としての素材の形態的変容である。〈語り手〉の「ここはとつと面白いところでござるほどに、本々と節をつけて語りませう」という提言に対して、〈聞き手〉が「はあ節でも面白いが、ところによつては聞えかぬる：ただ物語にめされい」と要請する時、自他同一化した主体は分裂し、自他差異化する。柄谷行人の言葉を借りて言えば、〈聴く＝語る〉主体として自己の分身たる〈聞き手〉〈語り手〉は、〈教える＝学ぶ〉主体として分裂し、その他者もしくは他者性をあらわにする。〈語り手〉と〈聞き手〉との間に保証されていた共通のコードが解体する。「天草本」の編纂者は、ここにおいて本来的な立場、〈教える＝学ぶ〉という非対称的な立場をはからずも露呈することになる。<sup>(三)</sup>

〈教える＝学ぶ〉立場を自覚的に意識するところから、これも柄谷の言葉を借りて言えば、初めて私的言語ならぬ、真の交通としての言語への可能性が拓かれるはずである。しかし「天草本」の編纂者は、再び〈聴く＝語る〉主体へと自己回帰する。「はあ節でも面白いが、ところによつては聞えかぬる：ただ物語にめされい」「と

もかうも御意に従へほとぎすと申すことがござる。心得まらした」という〈聞き手〉と〈語り手〉の応答は、共通のコードの不在から出発し、事後的に共通のコードを獲得するという過程を必然的に回避させる。その意味では、「天草版平家物語」のテキスト化の新しい可能性を閉ざし、あらかじめコードを共有する私的言語ゲームへと回帰する象徴的な言表であると言わざるを得ない。問答形式の持つ整合性・統一性は、「天草本」の編纂者が存在論的に孕む〈教える―学ぶ〉立場を無自覚的に隠蔽することによってのみ獲得されるものであった。だからといって、編纂者が自己同一化した独我論的な主体としての〈聞き手〉〈語り手〉によるコミュニケーションに逃れ得たとしても、主体が曝される本質的な立場が克服されぬ限り、主体を呑み込む陥穽は超克されぬままに存するのである。「天草版平家物語」が日本語習得の教科書としての性格を第一義的に要請されることにおいて必然的に伴う脱コード的言語行為と、コードの共有性を原則とする私的言語行為の狭間に、いずれかは陥らざるを得ないハビアンの悲劇性を見たいのである。ハビアンの得意は、ハビアンの陥る陥穽と表裏一体において感得されるものにほかならない。<sup>(四)</sup>

これに敷衍して、「天草版平家物語」についてイエズス会の評価に触れておこう。イエズス会の資料には「天草版平家物語」に言及したものは管見に入る限りでは特に存在しない。その中でジョアン・ロドリゲスの論述に一つの評価を見ることが出来る。ロドリゲスはまず外国人宣教師が学ぶべき書物について

生徒が学ぶべき書物であるが、これは文章体の書物、しかも文体が美しいため日本人の間でしかるべき評価を得ている過去の古典的著者の手になる書物でなければならない。

と述べた上で、次のように論じる。

生徒が学習に用いる書物は、たとえ文章体で訳してあっても、決してわれわれの書物を日本語に訳したものであってはならない。われわれのものの考え方から見れば適切であっても表現が「日本語として」ふさわしくないからである。また会話体による対話形式の書物、例えば会話体で書かれた Monogatari (物語) の書名で刊行されている書物であつてもならない。ましてやわが会のヨーロッパ人が日本語を学ぶことができるようにとわが会の日本人が日本語の古典作品を会話体にまとめたものの、例えばわれわれの文字で印刷されている会話体の Mai (舞) や会話体の Feikemonogatari (平家物語)、あるいは会話体で書かれた対話書、文章体の日本語で書かれた書物を会話体に換えたものであつてはならない。(ロドリゲス・日本語小文典 (上)・岩波文庫 p.38)

ロドリゲスは、翻訳もしくは口語訳になる日本語の書物を学ぶべき書物としては不適格として明確に排除している。しかも「天草版平家物語」は「舞の本」とともに名指して否定する。

これに対して、原典としての「平家物語」については、最高の賛辞を惜しまない。

厳密な意味での日本語による書物のうち、講読に適するものを分類して平易なものから挙げれば、つぎのとおりである。第一の最も初歩的な部類に入るものとしては Mai (舞) と Soxi (草子) がある。文体が平易で通常の会話体にも近いからである。第二の部類には、Saigihofoxi (西行法師) の著した隠者伝で Xenjixo (撰集抄) と呼ばれるものと Camono chomei (鴨長明) の書いた隠者伝で Foxjinju (発心集) と呼ばれるものがある。第三は歴史物語の意の Monogatari (物語) の名のついたもので、例えば Feikemonogatari (平家物語)・Foghen Feigi monogatari (保元平治物語)。これら二つはこの分野で最高かつ最も美しい文体をもつものである。第四は Taifeiki (太平記) と呼ばれる歴史書で、その文体はこの日

本で最も莊重にして崇高な文体である。（同上 p. 40）

ロドリゲスの論述が天草本の編訳者としてのハビアンに直接に向けられたとは解しがたいし、両者の間にいかなる確執があったかは知るすべもない。またロドリゲスの見解と、問答形式によって垣間見るハビアンの得意とを過大に関係づけて解釈することも当を得ないものである。ハビアンの得意が自己同一化した主体つまり自己の分身としての「聞き手」へ語り手への設定において得られるものである限り、他者性の顕在化つまりコードの共通性を有せぬものとして出現するロドリゲスとの間にいかなる交点も形成できないであろう。ハビアンにとって、問答形式が完璧であればあるほど、ロドリゲスに象徴されるこの陥穽に陥る悲劇性から逃れたいこともまた事実である。<sup>(15)</sup>

## （6）問答層の言語的浸透

問答形式の言語の特質は、端的に言えば、「今この平家物語をば書物のごとくにせず、兩人相對して雜談をなすがごとく、ことばのてにはを書せよとなり」という序の具体化である。種々検討を要するところではあるが、やや性急に言えば、典型的な日常の話し言葉の使用である。「天草版平家物語」の本文は、いわゆる原拠本に基づく可能な限り忠実な口語訳という方法的制約を有する。一方問答形式は編訳者の自由な裁量が方法的に許容される。問答形式を直接担う「聞き手」へ語り手は、自己同一化した主体つまり編訳者たるハビアンの分身である。両者は言語は言うに及ばず物語そのもののコードをも完璧に共有する。問答形式は単に物語への導入や狂言回しの役割を果たすのみではなく、物語そのものの構造化、展開に直接かわるという機能を果たす。それは「天草版平家物語」における言語的統括機能（結束機能）である。

問答形式はその自在性によって本文の中に浸透する。問答層の特色を顕在化させる言表と本文の口語訳たる言表とを截然と区分けすることは不可能であろう。まず方法的には区分する標識を設定することが第一の課題となる。そこで本稿では、問答層の言表を①文章の統括機能・②自在な挿入・③明確な口語性という三つの特性で捉えることから始めて、問答層の言表の腑分けに見当をつけることを課題とする。

一例をもって具体的に分析観点を示すことから始める。次の例は「天草本」の巻Iの最終章と巻IIの冒頭の一節である。対応する本文は「覚一本」である。

〔覚〕やがて十二の年尼になり、奈良の法華寺に勤すまして、父母の後世を訪ひ給ふぞ哀なる。有王は俊寛僧都の遺骨を頸にかけ、高野へのぼり、奥院に納めつつ、蓮花谷にて法師になり、諸国七道修行して、しうの後世をぞとぶらひける。か様に人の思歎きのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ。(岩波古典大系・巻第三)

〔天〕やがて尼になって奈良の法華寺といふ寺に行ひすまいて、父母の後世をとむらはれたと、申す。あはれや有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけて、高野へ上って、奥の院に納めて蓮華谷で法師になり、諸国を修行して主の後世をとむらうて果ててござる。このやうに人の思ひ歎きの積る平家の末はなんとあらうか? おそろしいことぢや。(巻I第十二章)

Vさてまことにたれにも、かれにも清盛は難儀をかけた人ぢやの? またその妓王がことをも聞きたい、お語りあれ。

Q長いことなれども、申さうず。清盛はこのやうに天下を掌に握られたによって、(巻II第一章)

問答形式の特性の一つに自在な本文への介入を挙げた。それは原則として原拠本には存在せぬ言表の挿入である。一つには原拠本の本文の著しい改変である。例に従えば、

1 〔天〕父母の後世をとむらはれたと、申す。あはれや有王は……果ててござる。

〔覚〕 父母の後世を訪ひ給ふぞ哀なる。

2 [天] このやうに人の思ひ歎きの積る平家の末はなんとあらうか？ おそろしいことぢや。

〔覚〕 か様に人の思ひ歎きのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ。

という施線の二つの言表である。原拠本の言表は、いずれも係助詞「ぞ」「こそ」による係り結び構文である。しかも「ゾー連体形」「コソー已然形」という呼応関係をきちんと保っている。結びの述語は「哀れなり」「おそろし」という心情形容詞である。原拠本の構造は、出来事「父母の後世を訪ひ給ふ」「か様に人の思ひ歎きのつもりぬる平家の末」を表す句と心情を表す句とが句的関係において係り結びによって統合される構文である。これに対して「天草本」は、出来事と心情とを分節し、それぞれ別の文として表現する。例1では心情の表出が対象とする出来事を異にする。原拠本の「哀れ」は出来事「俊寛の娘が父母の後世をとむらう」にかかわる心情表現であるのに対して、「天草本」では、有王の行為にかかわる心情に転換する。例2では出来事「か様に人の思ひ歎きのつもりぬる平家の末」と心情「おそろし」を完全に分節して、前者を疑問形式による直接法とし、後者を断定形式による心情表現としている。

「天草本」がこのような表現を採用したのは、係り結び構文にかかわる歴史的状況があったと考えることができる。例1・例2は係り結びを捨象することで、二つの文に分節される。

1 ①父母の後世をとむらはれた ②と、申す。③あはれや ④有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけて、高野へ上って、奥の院に納めて蓮華谷で法師になり、諸国を修行して主の後世をとむらうて果ててござる。

2 ⑤このやうに人の思ひ歎きの積る平家の末は ⑥なんとあらうか？ ⑦おそろしいことぢや。

両例を通じて①は出来事を出来事のままだに記述するのに対して、②は語り手が出来事に心情的に同化して悲哀・危惧を述べる。いま①の出来事の記述を素材的な表現と称すると、③は主體的な表現ということが出来る。心情表現としての④を拡大すると、「と申す」「なんとあらうか」「あはれや……（果て）てござる」という語り

の言表にまで及ぶことができる。直接的な心情表現と語りの表現は、主体的な表現において問答体の言語層に質的に連続する。

Q……と、申す。あはれや……てござる。

……なんとあらうか？ おそろしいことぢや。

Vさてまことにたれにも、かれにも清盛は難儀をかけた人ぢやの？ またその妓王がことをも聞きたい、お語りあれ。

Q長いことなれども、申さうず。

問答形式の言語層の浸透をこのように規定した上で、具体的な投影としての言表を確定してみよう。先例に即して言うと、係り結びの在り方が具体的な言表として挙げられる。係り結びに関して本稿ではこれ以上の言及を意図しないが、「天草版平家物語」を資料とする係り結び研究には、ここに言う言語層の質的特性を考慮に入れる必要があるということは指摘しておきたい。

問答層の言語的浸透の一具体相として本稿では「語り納めの言表」について述べてみたい。「天草版平家物語」の語り納めに言及したのは安田章(一九八一)であった。安田は、ハビアンが語り納めの表現形式として、「ト申ス・トタ聞コエタ」を指摘した上で、この二形式は「兩人相対して雑談をなすが如」き「平話」の形態を採ったためのものであること、さらにはHistoriaとしての平家だけでなく、「作り物語」にもかかわる、語りの仕組であることを論述している。卓越した見解であり、本稿もこれに従うものである。ただし安田は、その論述主題からして掉尾の表現形式について述べているのであって、問答層の言語的浸透ひいてはテキストの形成にかかわる観点から論じているわけではない。本稿では、問答層の言語的浸透という観点から掉尾の形式と機能を述べてみたい。<sup>(六)</sup>

「天草本」の四卷六十四章のうち二十七の章が「トタ申ス」「トタ聞コエマラシタ」「トタ聞コエテゴザ

ル」「イタト聞コエマラシテゴザル」で語り納められると言う。一つの完結した話全体を語り納める機能を果たす言表として、敬意を含めた「イタト申ス」「イタト聞コエタ」があると認めてよいことになる。おそらくこの形式は発話としての問答形式と呼応することによって語りの構えを構成するものと判断してよい。まず話全体の語り納めの類型を記述することから論を始めたいと思う。

各章の語り納めの言表は、①「イタト申ス」「イタト聞コエタ」型、②「イテゴザル（タ）」「イデゴザル（タ）」型、③「イコトヂヤ」型、④「イシマラシタ」型の四類型にまとめることができる。①「イタト申ス」「イタト聞コエタ」型は、巻Ⅱ・Ⅳにその大半が集中する。これに対して②「イテゴザル（タ）」「イデゴザル（タ）」型が巻Ⅰ・Ⅲに集中的に使用されることになる。ただし①型のうち「イタト申ス」型は巻Ⅳを中心とする。この分布からすると、巻Ⅰと巻Ⅳが対立的な様相を示すことになる。

# ①「イタト申ス」「イタト聞コエタ」型

1 「覚」近きをとをう申は、大納言殿の御渡あんなる所を、成経にしらせじとてこそ申すらめとて、其後は恋しけれ共とひ給はず。（阿古屋之松）

「天」近いを遠う言ふは、成親卿のござるところをわれに知らせまいとてこそ申すらうとて、そのちは恋しけれども、問ひもやらせられなだと申す。（巻Ⅰ第七章）

話の完結を示す「イタト申ス」は大略編訳者による加筆である。ただしこの形式が章の掉尾に限定して採用されるわけではない。テキストの途中においてもこの形式は用いられる。

2 「覚」いまだいとけなき心に何事をか聞きわき給ふべきなれ共、うちうなづき給へば、少将をはじめ奉て、母上めのとの女房、其座になみゐたる人々、心あるも心なきも、皆袖をぞぬらしける。福原の御使やがて（阿古屋之松）

〔天〕 まだいとけない心に何ごとをか聞きわきまへられうずなれども、うちうなづかるれば少将をはじめ奉って、母上、乳母の女房その座になみゐられたほどの人は、心あるも、心ないもみな袖をぬらさ

ぬはなかつたと、申す。さうあるところに福原のおん使ひ…… (巻I第七章)

## 3

〔覚〕

いまはよそにてだにも此有様を見をくる者のなかりけるがかなしさよとて、なかれければ、たけきもののふ共みな袖をぞぬらしける。熊野まうで天王寺詣などには (阿古屋之松)

〔天〕 今はよそながらもこのありさまを見送る者のないことの悲しさよとて、泣かれたれば：猛いものの

ふどももみな袖をしぼらぬはなかつた。熊野詣、天王寺詣などには (巻I第七章)

例2・例3には同一の表現「皆袖をぞぬらしける」が認められる。「天草本」は「ぬらさぬは」「しぼらぬは」と言表を変えている。この言表の持つ類義性の意義については、興味を惹かれるが当面の課題ではない。例1と比較して、例2は「ゝタト申ス」が加筆されることで同じであり、例3は「ゝタト申ス」の加筆がないということで相違する。例1・例2には閉話辞を加筆するのは、構成上の切れ目を認定したからであって、表現の上で特別な意味があつてのことではない。ただし例2と例3の間には、次に接続する文との関係の仕方に相違のあることが分かる。つまり例2では、後続の文が発話辞「さうあるところに」に始まるのに対して、例3では発話辞に相当する言表はない。このことが閉話辞「ゝタト申ス」の加筆に影響すると考えるのである。つまり「ゝタト申ス」の閉話機能が主体的機能であるがゆえに、例2では後続の発話に開始を明示する言表を要したと解するのである。それと相即的に閉話辞を欠く例2には、後続文の冒頭に発話辞は不要となる。発話完結機能を果たす閉話辞と発話誘導機能を果たす発話辞が語り手の意識の直接的な表出として事態を包み込むことで、「雑談をなすがとき」というテキスト化の原理が言表としてテキストの表層に顕在化するのである。例1・例2の違いを次のような図式で表すことができる。

2

……ぬさぬはなかつた

ト申ス。サウアルトコロニ

福原のおん使ひ……

3

……しばらくはなかつた

熊野詣、天王寺詣、などには……

かくして「タト申ス」は、テキストにおける話の構成要素となるまとまりを識別する標識としての機能を果たすことになる。ただし構成上のまとまりとしての要素を認定する基準は、天草本の編纂・口訳者の裁量に依存する。

「タト聞コエタ」がその敬態を含めて閉話機能を果たすことに異論の余地はない。例4は章の掉尾に加筆する用法である。「タト聞コエタ」に照応する原テキストは、係り結び「ゾー連体形（ケル・シ）」を原則とする。この点では「ト申ス」が必ずしも係り結びに照応しないつまり拘束されないのと著しい違いを示す。

4 [百] 閻浮愛執ノ継強ケレハ浄土ヲ欣フニ倦シ、今生ニテハ妻子ニ心ヲ碎キ当来ニハ修羅ニ墮ンコト心憂カルヘシ。サレハ是ヨリ都へ上リ妻子ヲ見テ後妄念ヲ離テ自害センニハシカジトソ定玉ヒケル。

[天] 閻浮愛執の絆が強ければ、浄土を願ふに倦み、今生では妻子に心をくだき、当来では地獄に落ちることが心憂い。さらば都へ上って妻子を見てのち、妄念を離れて自害せうにはしくまじいと定められたと、聞こえまらした。（巻IV第十章）

原テキストが話の掉尾において「タト聞コエシ」という閉話辞で完結する時、天草本はそのまま「タト聞コエタ」という形式をもって章を閉じる。例5がそれに当たる。

5 [覚] やがてそこに蟄居して、うかりし昔を思ひつづけ、宝物集といふ物語を書けるとぞ聞えし。

[天] やがてそこにとちこもって、うとましかった昔を思ひつづけて、宝物集といふ物語を書きたてられ

たと、きこえてござる。(巻I第十一章)

共に閉話機能を有する「トタト申ス」と「トタト聞コエタ」の間にはいかなる違いが存するか。字義的には「トタト申ス」は能動的行為の意味であり、「トタト聞コエタ」は受動的行為の意味である。安田章(一九八一)は、「トタト申ス」「トタト聞コエタ」を「カタル」「キク」に対立的に位置づけ、後者をポジティブな動詞による語り納めの表現とすることに対して、前者をネガティブな動詞による非人称的な語り納めの表現と規定する。そしてネガティブな動詞による語り納めを中世「語り」の表現機構と考えると論述する。的確な見解であり、本稿もその所説に従いたい。非人称的語り納めの表現と認めた上で、なおかつ「トトイウ」と「トタト聞コエル」との間に、能動性と受動性という差異をまずは認定したのである。そして能動性のうちに主体性を見たい。それと相即的に受動性のうちに客体性を見ておきたいのである。<sup>(七)</sup>

ところで天草本の章の語り納めの形式は、「トタト申ス」型が六十四章中二十七の章有る。ついで「トタト聞コエタ」型が九章を数える。両者で五割強というところである。先にも指摘したように巻別に見ると、巻IVにいたって初めて「トタト申ス」型が十四章有るのに対して、「トタト聞コエタ」型が四章と量的な違いが認められる。他の三巻は両者ほぼ拮抗しており、その限りにおいて量的差は認めがたい。

「トタト申ス」の特徴については、閉話辞としての閉話機能とそれに加えて新たに開示する後続の文が発話辞をもつて始まることを指摘しておいた。発話辞は後続の事態を誘導する機能を有することにおいて主体的である。「トタト申ス」「トタト聞コエタ」が共存する資料を例に閉話辞のあり方について検討しよう。特に本書に当たる「覚一本」と「天草本」とを対照すると、「天草本」における閉話辞の特徴がよく分かる。

6 「覚」①法皇はうしろを遙かに御覧じをくらせ給ひて、「末代こそ心うけれ。これをかぎりて又御覧ぜぬ事もやあらむずらん」とて、御涙をながさせ給ふぞかたじけなき。②院中の人々、少将の袖をひかへ袂にすがて名残をおしみ、涙をながさぬはなかりけり。③せうとの宰相のもとへ出られたれば、北

方はちかう産をすべき人にておはしけるが、今朝より此歎をうちそへては既命もたえ入心ちぞせられける。④少将御所を罷いづるよりながるる涙つきせぬに、北方のありさまをみたまひてはいとせんかたなげにぞみえられける。⑤少将のめのとに六条といふ女房あり。（少将乞請）

〔天〕

①法皇はうしろを遙かに御覧じおくられてただ末代こそ心憂けれ、これを限りでまた御覧ぜられぬこともやあらうずるとて、御涙を流させられたと申す。まことにこれは少将にとつてかたじけない儀でござった。②院中の人々少将の袖をひかへ、袂にすがって、名残を惜しみ、涙を流されぬはなかつた。③さて舅の宰相のもとへ出られたれば、その北の方は近う産をせられうずる人であつたが、けさよりこの歎きをうちそへてはすでに命も絶えいらるかと、疑ふほどにあつた：④少将御前をまかりいでらるるよりして流るる涙はつきせぬに、北の方の有様を見らるれば、いとどせん方なう見えられたと、聞こえてござる。⑤少将の乳人に六条といふ女房があつたが、（巻Ⅰ第五章）

例6①について、原撰本に当たる「覚一本」は、客体的事態「御涙をながさせ給ふ」と主體的判断「かたじけなし」に係り結び（「ゾー」連体形）によつて、一体化される表現である。一方これに対応する「天草本」は、一体化した表現を事態と判断とに二分する。客体的事態は完結した事柄として語り納められる。主體的判断は有題の判断叙述文として解説的機能を持つ表現形式に転換される。主客未分化な形式から客体的な形式への転換である。これに直接関与するのが「タト申ス」「儀ヂヤ」という言表である。付言すれば、「覚一本」と「天草本」の間に客体的叙述内容の変更は全くない。この分節した二文は、「タト申ス」「儀ヂヤ」と陳述する主体の立場をテキストの言表として顕在化させていることにおいて、いまだ能動的であり、主體的である。特に、能動的かつ主體的である「タト申ス」の機能が比較的客体的の濃厚な解説的叙述の加筆を容易にしたと解するのである。主客の融合を具体的に示す言表が閉話辞「タト申ス」とそれに呼応する後続文における発話辞「マコトニ」である。「タト申ス」が主体性のうちに留まり、かつ後続文の発話辞もしくは発話辞

相当の言表と呼応するもう一つの標識にテンスにおける未完了性を指摘したい。つまり天草本において閉話辞の機能を果たす限り、「ト申ス」は「ト申シタ」「ト申シタ」であってはならないのである。

「天草本」の④は、「ト申聞コエテゴザル」という閉話辞の加筆によって完結する。これが非人称的な表現であることにおいて①の表現と変わりはない。しかし詳細を見ると、①と④の間には違いがある。後続の文⑤は存在提示にかかわる事象叙述文である。存在提示の表現はそれ自体に話の冒頭に位置するという性質がある。それは文全体で発話辞の機能に相当する。発話辞との違いは存在提示文が客体的表現ということにある。④と⑤の連接を機能的に解すると、「ト申聞コエタ」という閉話の機能を有する閉話辞に存在提示という客体的叙述が後続する。その際に後続の文には発話誘導機能を有する発話辞を要しない。④⑤にはテキストの言表において客体性が保証されていると解すべきである。つまり④⑤は客体的叙述という同質・同レベルの言表として連続することである。閉話辞「ト申聞コエタ」が客体性を保証され、テキストにおける完結性・閉鎖性を有することの一つの標識としてテンスにおける二重の完了性を指摘したい。具体的には「トタと聞こエタ」は、「トと聞こエタ」「トと聞こエル」「トタと聞こエル」であってはならないのである。なお「ト申聞こエテゴザル」は、既に安田章が指摘しているように、ロドリゲス大文典によると、完了を表す分詞と記述されている。<sup>(8)</sup>

かくして安田の言う編纂・口訳者ハビアンズの「主客融合・客体擁立を織り混ぜた」手法を「ト申ス」「ト申聞コエタ」という二つの閉話辞のテキストにおける共存に読み取りたいのである。このことはまた②から③への展開にも同様に適用できる。具体的には②の客体的叙述から発話辞「サテ」を介在させての③への展開である。かくして同一機能を持つ類型的閉話辞は、章の掉尾にあって話を完結させるという拘束機能の度合によって、テキストにおけるそれぞれの位置を異にすることになるのである。ただしその度合も閉話辞のテキストにおける相対的關係によって定まることを付言しておかねばならない。例7はその証例である。

7 「百」入道モ惜ウヤ思ハレケン思ヒナヲシタラハ後ニハ当家ニ奉公モ致セカシトテ伯耆日野ヘソ流サレケル。其後源氏ノ代ト成テ鎌倉殿ヨリ土肥次郎真平ニ仰テ尋出レテ鎌倉ヘマイリ、事ノヤウ始ヨリ次第ニ語リ申セハ、鎌倉殿志ノ程ヲ哀テ能登国ニ御恩アリケルトソ聞ヘシ。（巻第四・二十三句）

〔天〕清、も惜しう思はれたか、思ひなほいたらば、のちには当家に奉公をもせいかしと言うて伯耆の日野へ流されたと、申す。そののち源氏の世になって、頼朝よりたづね出させられて、ことのやうをはじめから、次第に語りまらしたれば、頼朝もその志のほどを感じさせられて、能登の国へ知行を下されたと、きこえてござる。（巻II第二章）

問答形式に始まるテキストの掉尾は、それに呼応する言表を意識的にテキストの表層に健在化させる。問答形式における言表のテキストへの介入である。例7における「流されたと、申す」「語りまらした」「下されたと、きこえてござる」という表現がそれである。原テキストは、長兵衛信連の動静をひとまとまりの事柄として描く、つまりこの句の掉尾に閉話辞「ケルトソ聞ヘシ」を使用するのみである。「天草本」は二つの事態に分けてテキストを構成する。それが「タト申ス」「タトキコエテゴザル」という二種の閉話辞の使用の原因である。原テキストにおける句の掉尾「ケルトソ聞ヘシ」に準じて、天草本は章の掉尾も「タトキコエテゴザル」になるのであるが、前段の末尾に「タト申ス」を使用することには注意を払っておいてよい。掉尾の「タトキコエテゴザル」との相対的關係において末尾の「タト申ス」が位置する。「タトキコエテゴザル」の有する閉鎖性と「タト申ス」の有する解放性を反映すると解したのである。

付言すると、例7の章の掉尾「タトキコエテゴザル」が原テキストに準じての口訳化と見ることに不自然さはないものの、天草本の章の掉尾がすべて原テキストの掉尾「ケルトソ聞ヘシ」に準拠するとは限らない。閉話辞として基本的に同一機能を有するのであって、その差異はテキストにおける相対的位置關係に依存するのである。例9の対応を見る限り、原拠本との間の対応は一見恣意的でさえあるということになりかねない。

8 「覚」 いざもろともにねがはんとて、四人一所にこもりゐてあさゆふ仏前に花香をそなへ、よねんなくね

がひければ、ちそくこそあれ、四人のあまども皆往生のそくはいをとげけるとぞ聞えし。(祇王)

「天」 いざさらばもろともに後生を願はうと首うて、四人一所に籠つて、朝夕仏の前に花、香をそなへて、余念もなう後生を願うてつひに無事に終つたと、申す。(巻II第二)

9 「覚」 上古にはか様にありしかども事いでこず。末代いかあらむずらむ。おぼつかなしとぞ人申しける。  
(殿上闊討)

「天」 上古にはかやうのことがござつたれども、ことがいできなんだが、末代はなんとあらうぞと言つて、みな人も忠盛の面目を失はれたときは、気づかひをいたされたと、きこえてござる。(巻I第一章)

## ② 「ゝテゴザル(タ)」「ゝデゴザル(タ)」型

「天草本」の章の掉尾、特に巻I・IIIでは、この型の閉語形式による語り納めが基本的なテキストの構成方法である。「ゝテゴザル」は動詞を原型として、その敬態化によつて語りの性格を付与される言表である。この類には「ゝマラシタ」という形式が属する。「ゝデゴザル」は名詞を原型として、同じく敬態化によつて語りの性格を与えられる言表である。この類には「ゝコト(儀・次第)チャ」が属する。

① 「ゝタト申ス」「ゝタトキコエタ」型に比べて②「ゝテゴザル」「ゝデゴザル」型は、文のもつ本来の意味的性格からして語り納めに位置し得るのであつて、それ自身が閉語辞としての本質的機能を有するわけではない。したがつて主体性・客体性ということからするとはるかに中性的である。機能的にはスコープが狭くその分テキストの途中に挿入することが容易である。「天草本」が「ゝテゴザル」「ゝデゴザル」を話の途中にしばしば挿入するのは、巻I第一章から第五章あたりまでである。特に第一章は問答形式が多用されることに照応して頻繁に挿入される。

## 10 [覚]

①ふしまろびこゑも惜ずなけれけり。やがて十二の年尼になり、奈良の法華寺に勤すまして父母の後世を訪ひ給ふぞ哀なる。②有王は俊寛僧都の遺骨を頸にかけ、高野へのほり、奥院に納めつつ、蓮花谷にて法師になり、諸国七道修行して、しうとの後世をぞとふらひける。③か様に人の思敷きのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ。（有王）

## [天]

①伏まらうで声も惜します、泣き悲しまれたが、やがて尼になって奈良の法華寺といふ寺に行ひすまいて、父母の後世をとむらはれたと、申す。③あはれや王は俊寛僧都の遺骨を首にかけて、高野へ上つて、奥の院に納めて蓮華谷で法師になり、諸国を修行して主の後世をとむらうて果ててござる。⑨このやうに人の思ひ敷きの積る平家の末はなんとあらうか？ おそろしいことぢや。（巻I第十二）

例10は三つの要素からなる。①は直接的には「俊寛の娘が出家して父母の後世をとむらった」こと、②は「有王が俊寛の遺骨を首にかけ緒国修行して菩提をとむらった」こと、③は「平家の未来に対する危惧を投げかける」ことである。原テキストでは、三要素の結末文が係り結びによる表現形式を採る。そして①③の結末は心情的言表で納め、②の結末は動詞で終えている。天草本はテキスト化にあたって結末文に変更を加える。①については事柄と主体的判断とを峻別する。②については意味的に完結性を強化する動詞「果ツル」を加筆する。③は疑問形式によって危惧を表明し、それについての批評を表出する。語りの言表がテキストの表層に顕在化するの、①「タト申ス」、②「ゴザル」という閉話辞、そして③の全体表現によってである。

各語り納めにかかわる閉話辞の差異は、それぞれの言表の有する意味的差異にまずは起因すると考えられる。「タト申ス」は、非人称的語りを意味することにおいて伝聞性を含む。「ゴザル」は、主体の断定を表出することにおいて直接性を含む。それに基づいて両者は、客体的事態の表出を包むスコープの差異を生ずるとともに、テキストにおいて占める位置によって相対的に時間的先後関係を帯することになる。①は有王が俊寛

を鬼界が島に訪ね、俊寛の最後を看取ったあと、俊寛の娘に報告するという話である。「イタト申ス」はその話の語り納めとしての言表である。「イテゴザル」はその後の有王の動静についての掉尾の表現である。③は語りが聞き手に直接向かって語る表現つまり問答形式そのものにほかならない。

11 「覚」かくて清盛公、仁安三年十一月十一日、年五十にてやまひにをかされ、存令の為に忽に出家入道す。法名は浄海とこそ名のられけれ。其しるしにや、宿病たちどころにいへて、天命を全す。人のしたがつく事、吹風の草木をなびかすがとし。世のあまねく仰げる事、ふる雨の国土をうるほすに同じ。六波羅殿御一家の君達といひてしかば、花族も榮耀も面をむかへ、肩をならぶ人なし。されば入道相国のこじうと、平大納言時忠卿のたまひけるは、此一門にあらざらむ人は皆人非人なるべしとぞのたまひける。(禿髪)

〔天〕Qそれならば語りませう。清盛家督を受けとられてより、右に申したごとく、威勢、位も肩をならぶ人もござなかった。

さて清盛五十一のころ病におかれ、存命も不定に見えたによって、その祈りのためにか出家入道して法名をば浄海と名のられてござった。天道からその所作を御受納なさるるしにか、病もたちどころに平癒して、人の従ひつくことはまことに吹く風の草木を靡かすがごとく：また世のあまねく仰ぎ敬うたことは、さながら降る雨の国土を潤すやうにござった。それによってかの清盛の御一家の人々とさへ言へば、公家武家ともに面をむかへ、肩をならぶ人もござなかった。清盛の小舅に時忠の卿と申す人がござったが、この一門でない人はみな人非人ぢやと申された。(巻I第一章)問答形式をとった語り手(右馬之允)の語り出しの末尾形式は、聞き手を意識するがゆえに「イテゴザル」型の形式で語り終える。それがテキストにおける各事態の末尾に同様に顕在化する。天草本が接統助詞及び完了時制によってテキストを拘束することについては既に触れたところである。例11にあっても、原テキストの各

文を接続助詞によってつなぐことで、四つの事柄にまとめる。

① サテ

清盛五十一のころ病におかされ……によって……と名のられ

テゴザツタ

②

天道から……しるしにか……人の従ひつくことは……潤すやうに

ゴザツタ

③ ソレニヨツテ

かの清盛の……とさへ言えば……ならぶる人も

ゴザナカツタ

④

清盛の小舅に時忠の卿と申す人がござったが……と申された

原テキストの構成からして、このまとまりについての「天草本」の認定が妥当か否かは問うところではない。巻Ⅰ特に第一章にあつては、語る素材としての客体的事態は接続助詞の拘束機能によってひとまとまりの文脈にまとめられる。そしてそれを主体的な立場からの言表たる発話辞と閉話辞とが包みこむ。これが「天草本」におけるテキストの最小構成要素である。②「ゝデゴザル」「ゝデゴザル」型の基本的な閉話機能はこの最小構成要素を形成することにあるといふことができる。

「ゝデゴザル」は評語を含む説明叙述という形式であることから、「天草本」の編纂・口訳書の加筆になる説明叙述に用いられる。語り手の立場からの批評的言表がテキストに直接介入する。例12・13がそれである。これはテキストの展開において文脈的整合化を意図するテキスト構成にはかならない。編纂・口訳者は問答体の言語形式を採ること、テキストに明示性を与えるのである。それは同時に「兩人相對して雑談をなす」がごとき「語り」の実現でもあったのである。

12 [覚] 二人の者共大納言の左右の耳に口をあてて、いかさまにも御声のいづべう候とささやいてひきふせ奉れば、二こゑ三声ぞおめかれける。(小数訓)

[天] 二人の考ども成親卿の左右の耳に口をあてて、何とやうなりともお声をそつといださせられいと、ささやいて引き伏せ奉ったれば、二声三声ほどをめかれた：その体あはれといふもおろかなことでござる。(巻I第三章)

13 [覚] 父の卿は中納言までこそいたられしか、其末子にて位正二位、官大納言にあがり、大国あまた給はて、子息所従朝恩にほこれり。何の不足にかかる心つかれけむ。是偏に天魔の所為とぞみえし。(鹿谷)

[天] 親の卿にまさって子の成親卿は大きな国をあまた持たれ、また子息所従ともに朝恩にほこり、何の不足もなかったに、このやうな心のついたことはひとへに天魔の所為とみえた。この成親卿にかぎって平家に対して粗略あるまいことが本意でござる：その子細は(巻I第三章)

「テゴザル」「デゴザル」がテキストの最小構成要素を認定する標識になり、かつその要素認定の優先性が編纂・口訳者に属するとすれば、天草本のテキストとは構成の上で異なる話の展開になることもしばしば起こり得る。

14 [覚] しかるを忠盛越前守たりしとき、鳥羽院の御願得長寿院を造進して、三十三間の御堂をたて、一千一鉢の御仏をすへ奉る。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には關国を始ふべき由仰下されけり。境節但馬国のあきたりけるを給にけり。上皇御感のあまりに昇殿をゆるさる。忠盛三十六にて始めて昇殿す。(殿上闇討)

[天] ①しかるを忠盛に鳥羽の院と申す帝王得長寿院と申す寺を建て、また三十三間の堂をつくって一千一体の仏をすゑよ。その返報にはどこなりともあかうずる国をくだされうずると仰せられた。しか

るところでかの堂塔を宜旨のごとくにほどへて造畢せられたによって、そのをりふし但馬の国があらいたをすなはちくだされてござった。②鳥羽の院なほ御感のあまりに内の昇殿を許されたによって、忠盛三十六の年はじめて昇殿いたされたところで、（巻Ⅰ第二章）

原テキストは一つの事柄が一つの文によって表現される。したがって冒頭の接統詞「しかるを」は一文を超えて逆態的帰結に相当する表現に照応を求めることが可能になる。意味的照応関係からすると、「上皇御感のあまりに昇殿をゆるさる」が逆態的帰結を表すことになる。しかるに天草本のテキスト構成では、

① しかるを

忠盛に鳥羽の院と申す帝王「……」とおおせられた。しかるところで

……たによつて、そのをりふしに……くだされ てござった

というまとまりを抽出できる。「てゴザツタ」が語り納めの言表として「しかるを」の逆態的照応を遮断する。その結果、本来の帰結にあたる文「上皇御感のあまりに昇殿をゆるさる」は接統助詞によって後接の文「忠盛三十六にて始て昇殿す」の理由という位置に置かれる。帰結にあたる成分が接統成分として従属的成分に転換するのである。原テキストにおける話の展開、話のまとまりからすると、「てゴザツタ」は忠盛の初めての昇殿を述べる文に付して、「鳥羽の院なほ御感のあまりに内の昇殿を許されたによって、忠盛三十六の年はじめて昇殿いたされテゴザツタ」とするのが妥当であろう。

「天草本」のテキスト化の原理は明示化と語り化である。接統助詞による長文化は閉ざされたひとまとまりの文脈によって語る事態を明確にすることであった。それは同時に語り手の立場からの言表たる発話辞・閉話辞をテキストの表層に顕在化させることでもあった。語りの客体的素材を主体的な発話辞・閉話辞が包むという

形式によって、話の最小構成要素がテキストにおいて際立つのである。それが一つのまとまりとして聞き手に向かって語りがかけられるという構えを形成する。それは最小の要素から一つの章全体の構えへと連続する。さらに最終的には、発話辞に相当する冒頭の問答から閉話辞に相当する結末の問答の呼応関係へと階層的に連続する。「二人して雑談をなすがごとき」テキスト化とはこのテキスト構成を言うのと解されるのである。

「天草本」が原テキストにあたる「平家物語」を編纂・口訳した時、「平家物語」の持つ豊饒な文学性は、その内容を担うにはあまりにも異質な言語的・文体的制約のゆえに、喪失せざるを得ない運命にあった。その代価が安田章の言う「中世の語りの表現機構」の現出である。「天草本」の語りは、「平家物語」が辿ったあるいは辿る語りと重なる部分をテキストの表層に言表として顕在化させつつ、独自の語りを異国の読者の机上に出現させたのである。

言語史の流れにおいて注目しておかねばならぬことは、問答形式の言語層のテキストへの浸透が係り結び（「ゾー連体形・「こそ」已然形」と深くかわることである。本稿ではそれについて直ちに言及はしないが、特に閉話機能の「タト申ス」「タト聞コエタ」と関連することには注目に価することを指摘しておきたい。

## (7) ま と め

テキストの構想と構成を考察するに当たって、まず問答形式の類型・構造・表現性・機能などについて言及してきた。「天草版平家物語」における問答形式は、〈冒頭型〉一類・〈展開型〉四類・〈結末型〉一類の三種六類に類型化できる。テキストの構成に関与する問答形式の配置の特徴は、巻I第一章にはば典型的に現れる。そしてそれはテキストの枠組みとしての位置及び語りを促すという側面的機能を果たすのみではなく、原テキストの再構成つまり「天草本」のテキストの編纂方法に深くかわるものである。それはテキストの語りの言

語層にまで浸透するものであった。

「天草版平家物語」は、問答形式を軸にして、各章の題材が明示され、その題材に基づくテキストの再編成に整合性が付与されたとさえ言える。問答形式によるテキストの構成は、同時代的にも「キリシタン要理」を始めとして他に類を見るものの、問答形式そのものがテキストの枠組みに留まることなく話の内部に浸透して、いわゆる辞的機能にも比定できる機能を果たす例は「天草版平家物語」をおいてない。

「天草版平家物語」の編纂原理は

①今この平家をば書物のごとくにせず、兩人相對して雑談をなすがごとく、ことばのてにはを書写せよとなり。

②ことばのてにはのみにあらず、この国の風俗として、一人にあまたの名、官位の称なへあることをも避くべしとなり。

③尊きおん主 Iesu Christo の Evangelho の御法を広めんためなれば、この志願の便りとならざることをばをばみなもつて除かずんばあるべからず

④この物語を力の及ぶところは本書のことばをたがへず書写し、抜書としたるものなり。

という四点にあった。「兩人相對して雑談をなすがごとく、ことばのてにはを書写する」ことを目指して設定されたのが問答形式であると解するのは容易なことである。しかし問答形式を枠組みとしてテキストに配置すれば、この原理を実践的に実現できるものでもない。また既に指摘したように、この編纂原理は、「本書のことばをたがへずして」と「志願の便りとならざることをばを除く」こととの間において、本質的に背反性を持つものである。この矛盾を統一し、かつ「兩人相對して雑談をなすがごとく」テキストを確立するのは容易ならざることである。

安田章（一九八一）は、編纂者ハビアンが「天草版平家物語」の章の掉尾に、原テキストにない「タト申ス・

トキコエタを加えて使用していることを捉えて、

「本書」になかったであろうト申ス・トキコエタを付け加えたのは、「兩人相對して雑談をなすが如」き、  
蕉軒日録流に言えは「常之談論」のような「平話」の形態を採ったためである。

と述べている。安田の言うように、ハビアンが付加したト申ス・トキコエタが「兩人相對して雑談をなすがごとき」語りの形態の実現であるとすれば、それは問答形式における応答の言語表現「お語りあれ」「かしこまっております」「そのことござったに」との構造上の呼応関係において初めて、その付加が整合性を持つのである。Vとてもものに平家に対して起きた謀叛の起りをもまच्छとお語りあれ。

Qかしこまっております：嘉応元年のことござったに：（巻I第二章）

問答形式がテキストの構造・言表に深く浸透する所以でもある。そしてまた問答形式がこのような機能を有するがゆえに、編纂原理に内在する背反性を超えてテキストの構成に寄与することができるのである。その具体的な寄与の典型が問答形式による題材の提示であり、テキストにおける区分統合の原理的機能である。

このように問答形式を分析すると、そこには意図的に計画された原則が貫徹していることに気づくであろう。問答形式の配置には、構成上の整合性を求める配慮がテキスト全体にわたって存在するのである。「天草本」の構成に原テキストに束縛されない自由闊達な手法が認められるとすれば、それはひとえに巧妙な問答形式の用い方に託されると言ってもよいであろう。そしてそれはあくまでも私的言語ゲームに終始する限りにおける巧妙さであったことを銘記しておきたい。

「兩人相對して雑談をなすがごとき」語る形態の実現として問答形式がいかに満足のいくものであったか。ハビアンは最終章の結末の問答において、〈語り手〉に次の様に言わせている。

Q 平家の由来は大略この分でごさるほどに、どこでもこの物語においては、こなたも見事にあどを打たせられたほどに、重宝でござる。

「あどを打つ」とは、日葡辞書に

Adono vtcu.

話をしている相手に応じて、調子を合わせながら、このような適当な返事をする。また幕間劇「狂言」において、他の第三者が笑劇を演ずる人にうまく調子を合わせ、ほめそやしながら、人に返事をする事

とあり、もっぱら「聞き手」の合の手のことを意味するが、「天草版平家物語」におけるこの言い方は、「聞き手（右馬之允）」の応答の仕方へのほめ言葉であることは当然ながら、「語り手（喜一検校）」との間に成立する問答形式そのもののへの賛辞と解することができよう。編纂者ハビアンは、問答形式を採ることによって、困難なテキスト化を成功裡に成し遂げ得たことに、相応の自己満足を感じていたのであろうか。しかしその成功も所詮は共通のコードを共有する、自己の分身としての「聞き手」「語り手」との間における私的言語ゲームとしてのものにほかならない。ハビアンの創造になる「聞き手（右馬之允）」が聞き手の交替をも含めてその他者性をあらわにするとき、言語的成功は一転して、ハビアン自身の他者的存在性つまり共同体の外部に位置する他者としての自己を自覚させるに至るのである。問答形式は、「天草版平家物語」の編纂・口訳に当たって、ハビアンが自家薬籠中のものとし得た唯一の言表であったとも言えるであろう。（完）

- (一) 「祇王」の位置については、原拠本においても位置の不安定さが指摘されている。また「天草本」の編纂原理からしても、原平家物語の大幅な改変はあり得ぬにもかかわらず、「祇王」だけは例外的な扱いを受けている。その理由にこだわる考察は見当たらないが、「天草版平家物語」の特質の解明には等閑に付すわけにはいかない課題だと考える。
- (二) 安田章「コソ」の拘束力(国語国文第四十九巻第一号・一九八〇年)
- (三) 「語り手」の語りに対して聞き手が「聞こえかぬる」と異義を唱えることは、両者に共同のコードが不在であることを露呈する。自己同一化したハビアンが「聞き手」が自己と他者に分裂する。真のタイアログはここを原点とすることで始まる。しかし、ハビアンは「語り手」に「心得まらした」と言わせることで自己同一化に回帰する。
- (四) ハビアンはその生涯において自己と他者の非対象的關係に翻弄される。「天草版平家物語」は、ロドリゲスの批評的コメントに照らす限り、イエズス会においてハビアンは他者性に曝される。また「妙貞問答」の成功は、日本人という他者に自己を曝すことになり、「破提字子」は、イエズス会という他者に自己を曝すことになる。ハビアンは生涯コードを共有することのない他者・他者性に自己を曝すことになるのである。
- (五) ロドリゲスの批判的論述がハビアンに向けられるイエズス会の見解であると判断する証拠はない。またハビアンがこの見解に自覚的に向かったという証拠もない。このような役割的存在に曝されることにハビアンの存在論的悲劇性を見るのである。
- (六) 安田章「語り」の表現機構―中世の場合―(表現研究第三十四号・一九八一年)
- (七) 日本語の表現にあつては、受動表現、可能表現には主体の間接化が起こる。主体は消去され得るし、間主観的主体として一般化される。「ト申ス」と「タト聞コエル」の対応においてこの意味での間接性、客体性を「ト聞コエル」に認めたのである。
- (八) 「タト聞コエル」「タト申ス」が原拠本のいかなるテンスに対応するかは興味ある問題である。少なくともテンスにおける「ルル形」「タ形」の対立によるテンスの表現に近代語が至る過程を説明する手掛かりになるはずである。

(二〇〇一年一〇月九日 受理)